Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>EIN. DOKUMENT. DEUTSCHR. KUNST-DARMSTADT. 1901～1976
Author(s)	浜野, 節朗
Citation	デザイン理論. 1978, 17, p. 166-168
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53707
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

EIN. DOKUMENT. DEUTSCHR. KUNST—DARMSTADT. 1901～1976

ダルムシュタット1901年～1976年（ドイツ芸術の記録）と題された全5巻からなるこのカタログは，一昨年（1976年）の10月22日から，翌年の1月30日までの約3ケ月間，西ドイツのダルムシュタットで催された展覧会の記録である。

ダルムシュタットはフランクフルトの郊外に位置し，マンハイム，ハイデルベルク等の街と共に古くから風光明媚な街として有名である。特にダルムシュタットはヘッセン州の首都として，ドイツの中でも特に高い文化水準を誇ってきた街である。この街の中央駅に降り立つと，市街のほぼ中央に小高い丘と，尖端が極めて特徴的な塔が見える。これがマチルデンヘーエの丘である。

19世紀末，ドイツ，オーストリアに起った分離派（セセッション）の美術運動は，ウィーン，ミュンヘン，ベルリンという3つの都市を中心として展開されたが，1889年，ダルムシュタットではヘッセン大公エルンスト・ルドウィッヒの庇護の下に，ミュンヘン分離派，ウィーン分離派，の作家達を招請して芸術家村を造り，1914年まで独特の分離派美術運動を展開した。ダルムシュタット芸術家村での展覧会活動は，1901年の（ドイツ芸術の記録）展，1904年の芸術家村展，1905年の造園展，1908年のヘッセン州立展，1910年のドイツ芸術家協会展，1914年の芸術家村展，との6回にわたって催されている。
1976年の展覧会は実に62年ぶりに開かれた本格的な分離派の回顧展である。

仮製本のシンプルなカタログは，5巻が分冊になっていて，第1巻は（ドイツ芸術の記録・1901～1976）というタイトルで，9つの論文からなっている。論文は序章で，ハインツ・ヴィンクリート・サバイスによって展覧会の社会的，美学的な背景に関して述べられている。おもしろいものを2，3紹介すると，ウェルナー・ホフマンの論文はダルムシュタット分離派のもつ豪華な側面と，そうではないもう一つの側面に関して言及し，運動の内包していた両面性を具体的な事例をもって紹介している。

ゴロー・マンの論文はヘッセン大公，エルンスト・ルドウィッヒについて言及し，時代的な背景と共に，ダルムシュタット芸術家村の経済的な背景の所在を解明している。

又，中でもクラウディア・ポールの論文はユーゲントシュティルの底を流れる，メルヘンと神話の世界，と新ロマン主義，との関連についてかなり詳しく述べられており特に興味深

い，第2巻は，(芸術と装飾，1851～1914）というタイトルで，会期中にヘッセン州立博物館に出品された展示物の図録集である。素材，技法，ごとに簡単な小論文が付記されている。展示物は，アーツ　アンド　クラフツ運動，グラスゴー派からアール・ヌーヴォー，セセッションまでのかなりの広い範囲におよんでいる。巻末のポスターと小印刷物の図録にはコロマン・モーザーの蔵書カードやウィーン工房の絵ハガキ等のかなり珍しいものがある。第3巻は（1900年のアカデミー，セセッション，アバンギャルド）というタイトルで絵画中中心に集録されて，会期中はダルムシュタット美術館に展示されたものである。タイトルで示されているように，1900年を中心とした，ウィルヘルム・ライベル，マックス・スレヴォグ，アントン・アレクサンダー・ウルナーらのアカデミックな作品から，フランツ・フォン・シュトウック，コロマン・モーザー，カール・モルらの分離派の作品，エルンスト・ルドウィッヒ・キルヒナー，ケーテ・コルウィッツ，エゴン・シェーレらの表現派の作品，そして前衛として，シュールリアリズムのマックス・エルントス，バウ・ハウスのカンディンスキーやパウル・クレーの作品まで実に広範囲に紹介されている。巻頭の小論文は，1900年のアカデミー，セセッション，アバンギャルドという異った三つの美術運動の志向をわかりやすく説明し，ダルムシュタットの美術運動の先駆的な意義を述べている。第4巻は（マチルデンヘーエの芸術家）というタイトルで，ダルムシュタット芸術家村を中心に活躍した作家達のプロフィルである。展覧会ではマチルデンヘーエに展示された作品の図録で，作家別に紹介されている。巻頭のグラフは1889年から1914年までの芸術家村の変遷に伴う作家の出入りの一覧表で，極めてわかりやすく図示されている。ウィーン分離派から招請されてダルムシュタットの中心的なメンバーとして活躍したヨセフ・マリアオルブリヒやヨセフ・マルゴルドらの華麗な作品群も豊富に収録されている。

又，ここではミュンヘン分離派系のペーター・ベーレンス，パール・ベルク，ポール・ハウシュタインらの作品群と比較してみると，オーストリアとドイツの装飾的なセオリーの相異点が明確である。ドイツの装飾様式に学び，後にダルムシュタットの中心的なメンバーとなったアルヴィン・ミュラーがオルブリヒの強い影響を受けて，彼の死後，両者の折衷した装飾様式を生み出している点が非常におもしろい。第5巻は（マチルヂンヘーエの芸術家村）というタイトルで芸術家村の成立前夜からその変遷を紹介している。展示には芸術家村のミニュチュアモデルが製作されて，有名なエルンスト・ルドウッヒハウスベーレンスハウス，オルブリッヒハウス等の建築された年代が，立体的に把握できるようになっている。又，過去に取り壊された建築物の写真や展覧会ごとの仮説パビリオンの貴重な写真，現在残っていても見る事が困難な当時の内部写真等が，多数収録されていて，極めて興味深いものがある。

このカタログは，50ドイツマルクであるが，日本国内での入手は困難である。しかし，現在ダルムシュタットのヘッセン州立博物館には，まだ多少の残存部数があると思われる。分離派運動およびユーゲントシュティルの研究者には必読の貴重な資料である。

1978.9.1

（京都市立芸術大学　浜野　節朗　記）

誠実　美術書専門　買受

平安堂書店

京都市中京区六角河原町西入
TEL　京都　221－3084